長岡京跡発掘調査概要

昭和55年度

京都市埋蔵文化財調査センター
財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序

いうまでもなく京都市は、わが国随一といわれる歴史の堆積地であり、そこに埋没している遺跡、遺構、遺物は質、量ともに他の比肩を許さないものであります。

平安の開都以来、千有余年、王城の地としてわが国文化の創出、集散を重ねてきた本市の地下土層には、京都の歴史、日本の歴史が凝縮され、眠っております。さらに近年は、平安の開都以前、いわゆる先史時代の文化遺跡までも、その存在が確かめられ、いよいよ埋蔵文化財包蔵地としての評価を高めつつあります。

しかしながら、京都市はまた、古代から近代にいたるまで、王城の地として途切れることなく生きつづけ、今日もなお 150万の大都会として、明日へ向って発展をつづけているという他に類例をみない特異な街でもあります。このことは、保存、保護すべき埋蔵文化財が、常に大都市の活動の前に、破壊、滅失の危機にさらされていることにほかなりません。この現状に対応するには、可能な限り、これら歴史の物証を破壊、滅失から護り、光をあて、その意味するところを解明し、位置づけをして真の歴史の構築に役立たせること、とあわせて先人の貴重な遺産として後代に引継ぐのが、われわれに課せられた責務であると考えます。

このため、10数年来、発掘調査による記録保存を中心に、微力を注いできましたが、本報告書も、昭和55年度分として、国の補助を受け、京都市埋蔵文化財研究所に、全面的に調査を委ねて得られた成果であります。これをもって、学術研究なり、文化財保護の一助にでもなれば、身に過ぎた喜びであります。

なお、調査にたずさわっていただいた京都市埋蔵文化財研究所ならびに、ご協力いただいた調査員、事業者の方々をはじめ、関係各位のご支援、ご協力に、心から謝意を表します。

昭和56年 3 月31日

京都市埋蔵文化財調査センター

例　　言

1．本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が、京都市埋蔵文化財調査センターから委託を受けて実施した文化庁国庫補助を伴う昭和55年度の長岡京跡発掘調査概要である。

2．発掘調査は、昭和55年12月23日から昭和56年1月19日まで行った。

3．標高は、京都市水準点No.44、昭和52年測量14m44cm5mmから求めた。方位は、真北をさしている。

4．本書の編集・校正は、財団法人京都埋蔵文化財研究所調査部が行った。

5．執筆は菅田薫がおこない、写真撮影は牛嶋茂が担当した。

目　　次

I　調査に至る経緯 …… 1

II　調査経過 …… 2

1　調査地と周辺の遺跡 …… 2

2　調査経過 …… 4

III　遺構・遺物 …… 4

1　調査の概要 …… 4

2　遺構 …… 5

3　遺物 …… 5

4　まとめ …… 6

挿図・図版目次

図1　調査位置図 …… 1

図2　周辺の遺跡 …… 3

図3　平板図 …… 4

図4　ＳＤ－４出土瓦器 …… 5

図5　東土川遺跡出土の鉄製鋤先 …… 6

図版1　遺跡平面図・断面図

図版2　1　調査地付近航空写真

　　2　トレンチ全景

図版3　1　南北断面

　　2　調査風景

　　3　ＳＤ－４出土瓦器

I　調査に至る経緯

京都市南区久世東土川町191－1・192－1において同所土地所有者山崎源次郎氏は、倉庫の建設を計画した。

当該地は、長岡京左京二条二坊に推定され、弥生時代の著名な遺跡として知られる、東土川遺跡に隣接している。また、長岡京の条坊制が「平城京」型の場合敷地北側、「平安京」型の場合敷地中央に、東西方向の大路側溝が検出される可能性があり、長岡京条坊復原の研究上重要な位置をしめる地点といえる。

以上のことから、すでに基礎部分の掘削が実施された後であったが、京都市埋蔵文化財調査センターは発掘調査の必要性を認め、施主・施工業者と協議を行ない、工事に支障のない範囲でのみ発掘調査を実施することとなった。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、京都市埋蔵文化財調査センターの指導のもと発掘調査を担当することになり、1980年12月23日より開始した。

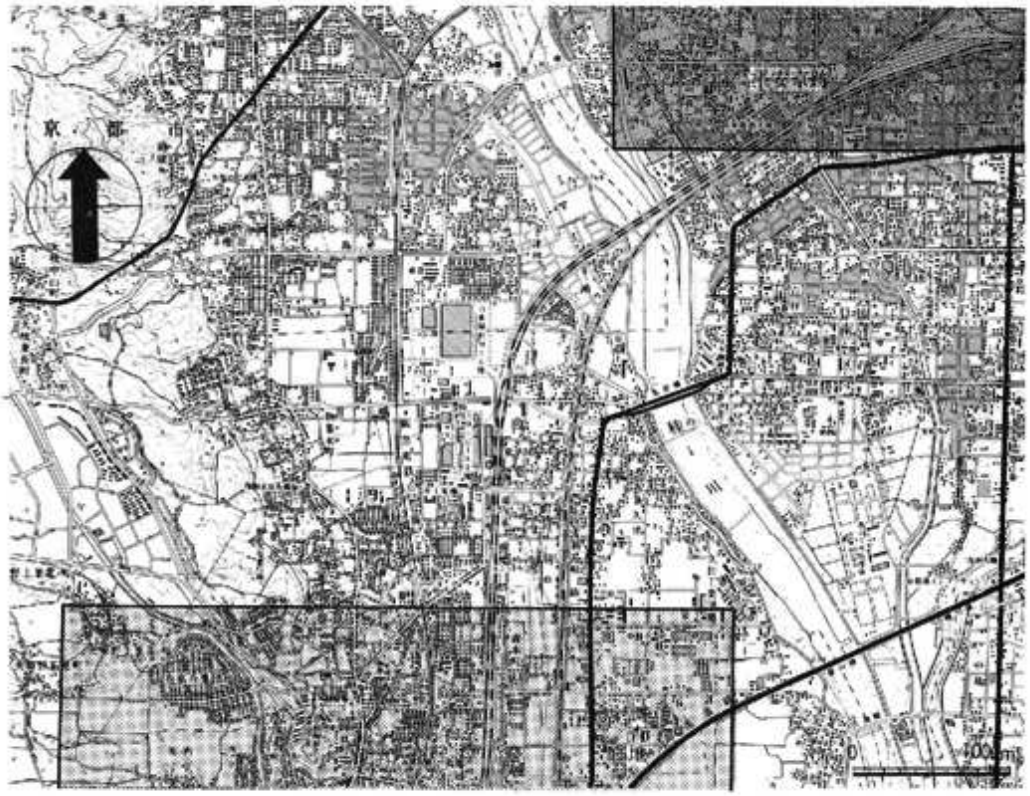


図1　調査位置図

II 調 査 経 過

1 調査地と周辺の遺跡

南区久世東土川町に所在する今回発掘調査地は、南面する道路により向日市と接しており、京都南工業団地内に位置している。当該地付近の工業団地化は、近年急速に進められ、その結果として周辺地区の自然環境はもちろんのこと、生活環境にいたるまで変化しつつある。また、これにともない埋蔵文化財の破壊も急速に進み、同時に発掘調査の急増と新たな成果も集積されてきている。

調査地の位置する桂川右岸平野部は、桂川の運ぶ豊富な水と肥沃な土壌により、弥生時代以降数々の著名な遺跡が成立する。縄文時代晩期以前の遺跡はあまり検出されていないが、平野部の西側向日丘陵上に、その足跡を残している。縄文時代晩期の遺跡としては、名神高速道路を作る時に発掘調査された東土川遺跡がある。弥生時代の遺跡は、山城最古の弥生遺跡として知られる雲の宮遺跡をはじめとして、羽束師遺跡・鶏冠井遺跡・東土川遺跡・森本遺跡・中久世遺跡・上久世遺跡などがある。羽束師遺跡は、1980年８月から11月まで発掘調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代初期の土器が旧河川から多量に出土した。中久世遺跡は、数次にわたり発掘調査が実施されているが、1977年におこなわれた調査では、弥生時代前期から後期に至るまでの土器が出土しており、山城における弥生土器編年において指標となり得るものである。

古墳時代の集落はいまだ明確にされていない。しかし、1976年冬におこなわれた羽束師遺跡の調査では道路状遺構、1980年には、土坑・溝などが検出されており、竪穴住居址など、集落址の解明もまじかであろう。平野部西の向日丘陵上には、元稲荷古墳（前方後方墳）・寺戸大塚（前方後円墳）などの前期古墳および、中山古墳群・大原古墳群などの後期古墳群が存在している。

今回の発掘調査地は、長岡京左京二条二坊に推定される地区である。前述したように、長岡京条坊に関連する遺構の検出が期待できるとともに、東側に東土川遺跡、西側に鶏冠井遺跡が接しており、長岡京以前の弥生時代・縄文時代の遺構が検出される可能性もある。

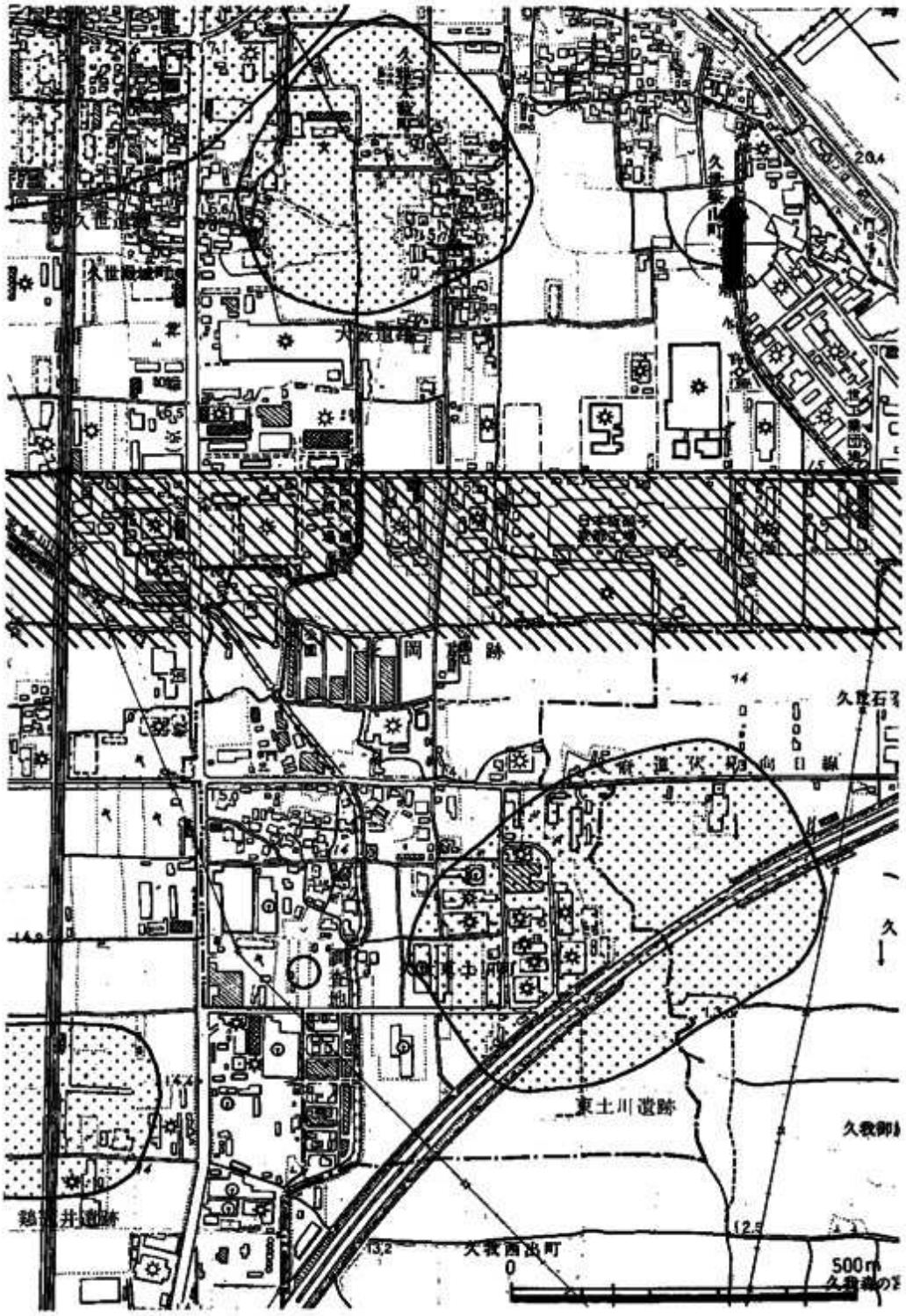


図2　周辺の遺跡

2　調査経過

発掘調査は、1980年12月23日から開始された。トレンチ調査に先立ち、すでに掘削されていた建物基礎部分の断面清掃および観察をおこなった。その結果に基づきトレンチを設定。トレンチは、4×19メートルの南北トレンチである。

積土から人力で排土を開始したが、積土が約1.5メートルあり、しかも礫を含む山土であったため、かなりの日数を要した。また、埋め戻しも人力でおこなったため、現場作業の大半を現代層の除去と埋め戻しに費した。

Ⅲ　遺　構・遺　物

1　調査の概要

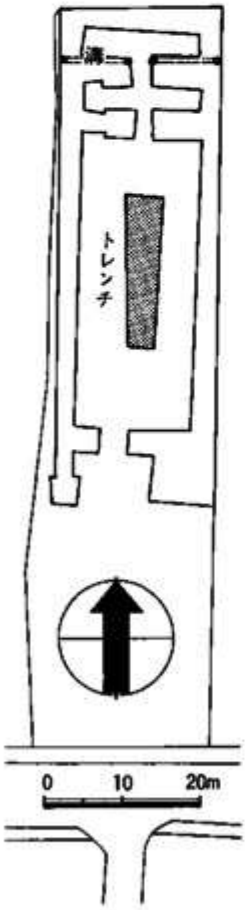


図3　平板図

基礎部分の断面観察の結果、土坑状の落ち込み1ヶ所、溝状の落ち込み1本が検出された。溝は、敷地北側で検出されたもので、東西方向の溝と思われる(図3)。長岡京条坊復原では、平城京型の南一条大路（平安京型では、近衛大路にあたる）に近い位置である。基礎部分の断面観察のため詳細は明らかではないが、東西両隅において確認でき、大路側溝と考えてよいと思われる。しかし、出土遺物が検出されなかったため時期的な問題を残している。

基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　暗灰色泥土層

第Ⅱ層　暗茶灰色砂泥層

第Ⅲ層　淡褐灰色泥砂層

第Ⅳ層　茶灰色泥土層

第Ⅴ層　黄褐色粘土層

第Ⅵ層　褐灰色粘土層

第Ⅶ層　黄灰色粘土層

第Ⅰ層は、耕土である。この第Ⅰ層暗灰色泥土層の上には積土が約1.5メートル積まれているが、これは、今回の工事に先立って積まれたものである。

第Ⅰ層暗灰色泥土層から第Ⅲ層淡褐灰色泥砂層までは、近・現代の陶磁器片を含んでいる。ＳＤ－１・ＳＤ－２・ＳＤ－３は、第Ⅲ

層淡褐灰色泥砂層を切り込んで成立している。

第Ⅳ層茶灰色泥土層は、今回検出された主な遺構の成立面である。検出された溝は、ＳＤ－４からＳＤ－８までの溝５本であった。すべて南北方向の溝である。この第Ⅳ層茶灰色泥土層からは、弥生土器片と思われる土器一片が出土した。

第Ⅴ層黄褐色粘土層、第Ⅵ層褐灰色粘土層、第Ⅶ層黄灰色粘土層は地山層と考えられ、出土 遺物も無かった。

２　遺構

ＳＤ－１・ＳＤ－２・ＳＤ－３

第Ⅲ層淡褐灰色泥砂層を切り込み成立している。底部は第Ⅴ層黄褐色粘土層まで切り込み深さは約35cm、検出面での幅25cmから30cmである。溝内には、竹が置かれており、暗渠排水と思われる。

ＳＤ－４

検出面での幅30cmから50cm、深さ15cmから25cmである。第Ⅳ層茶灰色泥土層を切り込み成立している。埋土は、暗褐色砂泥層であった。瓦器椀，土師器杯，甕，須恵器甕などが少量であるが出土している。他に銭が出土しているが、腐蝕著しく型式等不明である。

ＳＤ－５

第Ⅳ層茶灰色泥土層を切り込む。埋土は、暗褐灰色砂泥層であり、ＳＤ－４に切られている。出土遺物は無い。

ＳＤ－６

第Ⅳ層茶灰色泥土層を切り込む。残存状態が悪く、底部のみ土坑状に検出された。埋土は、暗灰褐色泥砂層である。出土遺物は無い。

ＳＤ－７

第Ⅳ層茶灰色泥土層を切り込む。幅40cm、深さ５cmから15cmある。埋土は暗褐色砂泥層で、出土遺物は検出されなかった。

ＳＤ－８

西壁にかかって検出される。全体が明らかでないが、土坑の可能性もある。深さ約30cm、埋土は淡褐灰色砂泥層である。

３　遺物

出土遺物は極めて少なく、図化されたものは、図４の瓦器２点であった。１は、口径11.4cm、口縁部から体部の破片であり、

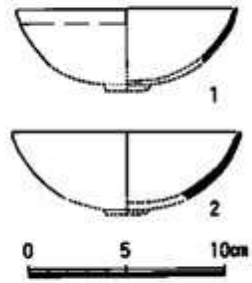


図４　ＳＤ－４出土瓦器

底部を欠損している。胎土は精良で灰白色を呈し、外面は黒色である。口縁端部は、ヨコ方向にナデられているため、ゆるく外反している。2は、口径11.6cm、底部を欠損している。1・2ともに磨滅が著しく、調整手法等不明である。時期は鎌倉時代である。

4　まとめ

すでに基礎掘削が完了していたため、充分な発掘調査を実施することができなかった。基礎の断面観察により検出された溝も、長岡京条坊に伴う溝であることが推定されるが確証はない。また、調査により数本の溝を検出したが、それらの溝が乙訓郡条里の中でどのような性格を持つものか確定し得ない。

調査地の北方の久世一帯は、「白河本東寺百合文書」(注1)などの古文書史料に記され、庄園村落史研究上重要な地域である。(注2)近年発掘調査により、当該地域周辺での中世遺構が明らかにされてきており、文書によって明らかにし得ない、庄園村落の構造が解明されてきている。今回の調査により検出された中世の遺構・遺物が、中世庄園村落研究の上での一資料となれば幸いである。また、桂川右岸流域下水道工事に伴なう発掘・立合調査、東土川遺跡などの調査において、弥生時代以降、連綿と発達してきた純農村としての桂川右岸平野部の様相が明らかにされつつある。

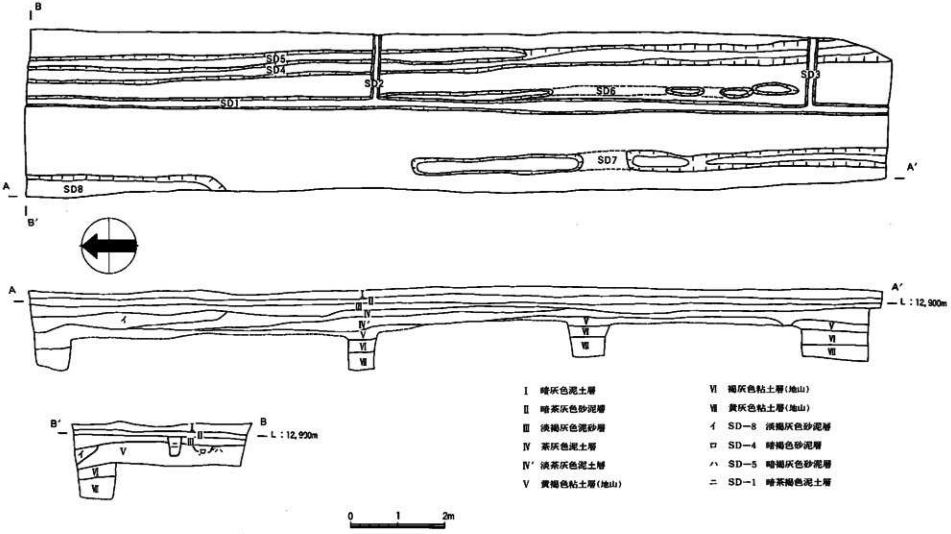
今回の調査は、ごく一部にトレンチを設定したものであり今後、京都の近郊住宅地、工業団地として再開発される周辺地域において、より本格的な発掘調査を実施することが望まれる。

注1　「平安遺文」707号・弘世荘検田丸帳など

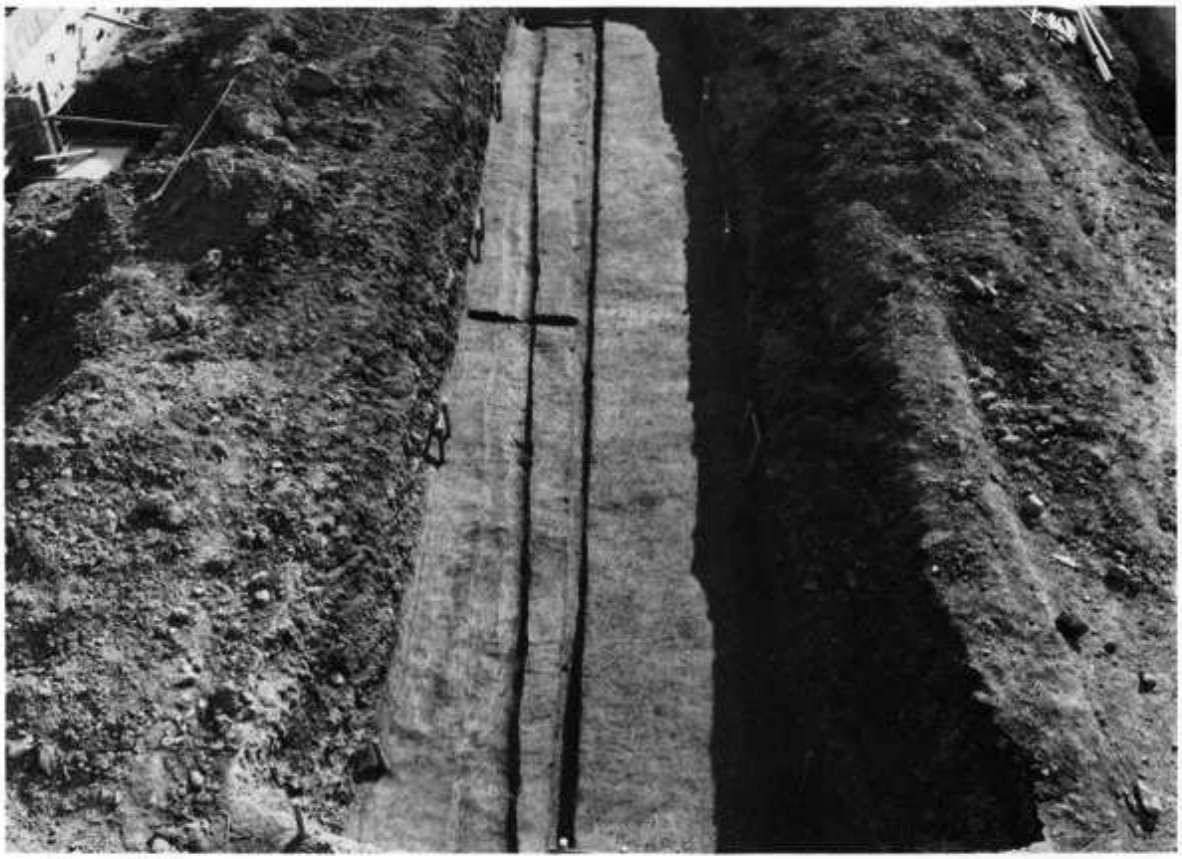
注2　上島有著「京郊庄園村落の研究」塙書房　1970年

図5　東土川遺跡出土の鉄製鋤先

図　　版


B
B′
A
A′
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SD7
SD8
L：12,900m
Ⅰ　暗灰色泥土層
Ⅱ　暗茶灰色砂泥層
Ⅲ　淡褐灰色泥砂層
Ⅳ　茶灰色泥土層
Ⅳ′　淡茶灰色泥土層
Ⅴ　黄褐色粘土層(地山)
Ⅵ　褐灰色粘土層(地山)
Ⅶ　黄灰色粘土層(地山)
イ　SD－8　淡褐灰色砂泥層
ロ　SD－4　暗褐色砂泥層
ハ　SD－5　暗褐灰色砂泥層
ニ　SD－1　暗茶褐色泥土層
0　1　2m

1．調査地附近航空写真



2．トレンチ全景

1．南北断面

2．調査風景

3．ＳＤ－４出土瓦器

長岡京跡発掘調査概要

昭和55年度

発行日　昭和56年3月31日

発　行　京都市埋蔵文化財調査センター

住　所　京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町
TEL (075) 441－5261

編　集　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町
TEL (075) 415－0521

印　刷　真　陽　社